

Ulysses 第13挿話 'Nausikaa' における消費文化とジェンダー

森岡実穂

1.

Ulysses 第13挿話 'Nausikaa' の前半は主に、友人と幼い子供たちを連れて浜辺を散歩している片足の不自由な少女 Gerty MacDowell の意識と半分同化したような、彼女に同情的な共感を抱いているように思われる語りによって描かれる。この部分の語りは一般に「婦人雑誌の文体 ('total takeover of woman's magazine style')¹⁾ と評されている。しかしなぜあえてこの文体なのか? 例えば Marilyn French が 'pervaded by the worst stereotype of femaleness'²⁾ と言っているように、Joyce がこれを女性の文体の代表的な悪い例として敢えて利用した、と考えている批評家もかなりいるようである。しかしこれは真に女性独自の文体なのであろうか?

この部分が、少女趣味な、陳腐にロマンティックな空想パターンに支配されている事には疑問の余地はないように思われる。登場直後、彼女は近所の学生 Reggy Wylie とのぼんやりした恋が終わりかけている事に、ナルシスティックに心を痛めている。しかし幸運を呼ぶというブルーの服を着てきた事が示すように、彼女は完全に新しい男性を待ち構える状態にあり、ひとたび彼女にとっては通りすがりの男 Leopold Bloom を見付けてからは「さまよえるユダヤ人」(もしくは「さまよえるオランダ人」)の物語に彼と自分を重ね、自分こそが彼を身を挺して救済する者という幻想に酔い始め、ついには自己陶醉/自己犠牲的に彼の欲望に奉仕するに至るのである。バラッドの伝説ならぬ婦人雑誌の物語によって、彼女は自分が持つべき出会いについての空想をふくらませていた。いってみれば、Gerty の読んでいるような雑誌が彼女たちに与えているのは、「いつか王子さまが」、もしくはその変形である「オランダ人を救済する私」というような、男の存在があってそれに関わることで初めて人生が完結し意味を持つという幻想

である。男に対して自分が出来ることについての彼女の幻想はどんどん拡大していく。

'If he had suffered, more sinned against than sinning, or even, even, if he had been himself a sinner, a wicked man, she cared not. ... There were wounds that wanted healing with heartbalm. ... she just yearned to know all, to forgive all if she could make him fall in love with her, make him forget the memory of the past. Then mayhap he would embrace her gently, like a real man, and love her, his ownest girlie, for herself alone.(p.466)³⁾

ここには、家庭は外界の倫理的危険から人々を守る避難所であり、女性はその守り手であり、男性を精神面において保護し救済する役目を担うという Ruskin が説いたような Victoria 朝的な価値観を見付ける事ができる。こうしたラブ・ストーリーの究極の結論は、Gerty も言っているように「彼ひとりのものになる」事、結婚という「所有/被所有」の関係成立にある。もちろんこの場の現実では Gerty と Bloom は一言の会話も交わしていない全くの行きずり、そんな結論に達しようもないのではあるが、とにかく彼女の意識の中ではこのような典型的な父権制的女性像がうっとりと語られていく。

一方、この部分を読み進めるとき、このようなロマンス小説的なディスコースにそぐわない不協和音が妙にするりと挿入されていて、どうしてもそれが目に付いてくる。それは現実離れたおとぎ話とは正反対の現実そのものの、商品名や美容知識である。彼女の最初の紹介の部分にその最も顕著な例のひとつが見て取れる。

Her figure was slight and graceful, inclining even to fragility but those iron jelloids she had been taking of late had done her a world of good much better of Widow Welch's female pills and she was much better of those discharges she used to get and that tired feeling. The waxen pallor of her face was

almost spiritual in its ivorylike purity though her rosebud mouth was a genuine Cupid's bow, Greekly perfect. Her hands were of finely veined alabaster with tapering fingers and as white as lemon juice and queen of ointments could make them though it was not true that she used to wear kid gloves in bed or take a milk footbath either. (p.452)

「ほっそり優雅な姿」「バラのつぼみのような口」「雪花石膏のような手」などの優雅ながらも陳腐な定番表現のすぐ前後に、やせているが故の虚弱の気味も最近では別の「婦人丸薬」より効き目がある「鉄剤カプセル」のおかげで具合がいいとか、その白い手は「レモンジュースと軟膏のおかげ」等々の、非常に現実的で即物的な事項がはさまれている。最も婉曲表現を好みそうなロマンティックな物語のディスコース(例えば Declan Kiberd は Penguin 版の注で、ここでは露骨な肉体的性はさげられていると主張している⁽⁴⁾)に、突然婦人科系の不調への言及が入り有効な商品名が列挙されるという事態はあまり尋常なものとは思われない。この例を筆頭に、'Nausikaa' 前半にはこの他にも 'Madame Vera Verity, directress of the Woman Beautiful page of the Princess Novelette'(p.453)、'blushing scientifically cured and how to be tall increase your height'(ibid.)、'the letters and samples ... about Catesby's cork lino'(p.461)、養毛剤らしき 'the thingamerry'(p.467) 等等、広告そのままの非常に具体的な商品名や、雑誌での美容や健康についての実用的アドバイス、おまじないや占いなどがたびたびごく自然に Gerty の恋愛ロマンス幻想の中に混入してくるのである。

この不気味な取り合せを何の疑問もなくいっしょくたにしてしまうのが婦人雑誌のディスコース、と言ってしまうまでもである。しかし、Ulysses の読者にこれだけ不調和を感じさせる一方で、この Gerty の意識を借りた語り主体にはあたかも違和感も疑問も全く感じられていないかのように思われるのはなぜか。それは、Gerty にとってこのディスコースの基盤となっている雑誌がいてみれば一種の Bible であり、彼女の意識の中ではそこに書かれている事すべてひっくりかえって一種の信仰の対象となっているからだ。一貫して提唱されているのは「これであなたは幸せになれる」という題目である。絵空事のようなロマンスも、運命の男性と出会うことであなたの人生は意味を持ち幸せになれるという刷り込みの手段なのである。「きれいになりたい」という意欲をそそらんとする美容記事とあふれ

んばかりの商品知識は、ロマンス小説に描かれた恋愛のもたらすものの効果とリンクして、「これがあってこそその幸福」という思いを簡単に内面化してしまうのである。

婦人雑誌のディスコースで重要な位置を占めるのは、いま挙げた例に見られるような広告という消費経済の言語である。広告の言語で肝要なのは、一言で言えば信ずるに足る幻想を作り上げて示すことである。John Berger がその広告論で指摘しているように、広告の真实性は「<見る者=購買者>に与える幻想がどれだけ有効性を持つかによって判断される」のである⁽⁵⁾。では、どのように「有効な幻想」は創られるか。そのモノがあることはいい事だと無条件に信じさせること、さらに言うならそれが消費者の絶対的な幸福を左右するかのよう信じさせることが、消費者に商品を買わせる上での最も効果的な戦略なのである。具体的な方法論としては、まずその商品の存在をアピールする事で現在の「不足」に気付かせ、その上でその充足が「幸福」につながると納得させることになる⁽⁶⁾。Bloom が今朝目に留めていた Plumtree's Potted Meat の広告('What is home without / Plumtree's Potted Meat? / Incomplete. / With it an abode of bliss' p.91) はその好例である。既に Jennifer A. Wicky などが述べてきた事の繰り返しになるが、Ulysses ではこのように商品の広告が「信ずるものは救われる」という一種の宗教——それもかなり組織的に浸透した——になっているのである⁽⁷⁾。

'Nausikaa' では、この広告の宗教的なあり方の事例は、Gerty が酔っ払いの父親のことを考える場面で見付けることができる。

Had her father only avoided the clutches of the demon drink, by taking the pledge or those powders the drink habit cured in Pearson's Weekly, she might now be rolling in her carriage, second to none.(p.460)

彼女の愚鈍なまでに素直な感性は、Pearson's Weekly の広告にあったいかにも怪しげな飲酒癖治療薬の効果を万全のものと信じるばかりか、そこから一気に、この薬によって父のこの悪癖さえ治れば自分たちは夢のように幸せになれる、という所までつなげて考えている。前述の Plumtree's Potted Meat も、広告においてはその存在がいきなり「家庭の幸福」に関わらされていたのが思い出される。ある人々にとってはこれは単なる広告特有の誇張表現でしかないが、これを文字どおりに

信じてしまう人もいる、という事がここでは示されている。少なくともここでは、婦人雑誌のディスコースにおいてはそうだ、と示されていると言えるだろう。消費経済において、こうした雑誌の愛読者たる女性たちは、まず「幸福とは何か」のモデルを提示される事で（それは大抵「何かを所有すること」であるが）自らの現在の「不足」に気付かされ、その結果「（これらの商品を）信ずるものは幸せになれる」という幸福に関する共同幻想を見だし、内面化し、心酔しているということである。そういう彼女たちが結果的に、えてして資本家によっていよいよ搾取される消費者となりがちなことは否定できないだろう。このような雑誌のみならず、逃げようもない程に日常のあちこちのシーンに遍在する大量の広告は、建前上「自由な」消費者に、コード化された価値観を力技で刷り込んでいく¹⁰⁰。そして広告の言語はそのまま各人の思考の基本ピースの一部となり、内側から彼/彼女をコントロールするようになっていく。消費者は一見金を払って選べる立場にある「王様」として優位にあるかも知れないが、このような状況では結局状況をわかっていない幸福な「奴隷」といった方が当たっているだろう。

そしてこのからくりの最も肝要な効果は、恋愛による幸福という幻想と商品による幸福という幻想が重なった部分に発現していると言えよう。Gertyの読んでいる婦人雑誌のタイトルは *Princess Novelle*、婦人雑誌としては当然ながら、広告以外の主内容は、自分も誰かの *Princess* になるべき恋愛絡みの記事や小説である。それらに通じる発想体系が父権制度下での女性の規範化のベースをなしている事は前述したが、同時に消費経済と連動することで、女性の搾取状況は多重化する¹⁰¹。婦人雑誌のディスコースでは、性（の政治学）の対象として女性を搾取する男性側の都合と、消費者を取り込もうとする資本家側の都合が一致して、女性の幸福の神話が強力に推進されているのである。その鍵となるのは、女性にとって「美」が幸福へのパスポートだという定式である¹⁰²。 *Princess Novelle* に載っている沢山の美容関連商品の広告や提携記事は、量的にも紙面のひとつの中心をなし、前述の Gerty の商品に彩られたロマンスの夢のような形で消費者たる読者たちの意識に内面化されている。そして、美しくなることで恋愛/結婚の市場での自分の交換価値が上がり、より幸福に近くなるという定式は、おきまりのロマンス小説によって補強されるのである。この両面攻撃によって、女性たちを「消費者」という巧妙にコントロールされる主体

とする事で、父権制度下での彼女たちの「商品」としての存在を隠蔽しつつ、その「商品価値」を自動的に上げていくことに成功しているのである。

婦人雑誌はこのように、男性中心の父権社会の中で所有/消費されるべき女性たちに、この社会の効率的な運営に適した「幸福」という個人的幻想のもととなる、一種の規範的共同幻想を与える装置として働いていると言える。 Bloom の出入りしている新聞社とおそらくはそう変わりなく、 *Princess Novelle* の編集部にも女性はほとんどいないであろうというのは単なる憶測であるが、大衆雑誌出版が資本主義内の有力・多数派に多かれ少なかれ迎合しがちなものだと考えるとき、「婦人雑誌」のディスコースは本を作っている編集者、そして広告を出している資本家といった男性中心の社会規範によるものなだと十分に推察される。その意味で Gerty が生産に関与するこのテキストは、男性の与えた規格をかなり無自覚に受け入れた一種の「規格品」であり、完全なる「女性のディスコース」と見なすには根本的な問題をはらんでいる。但し、こうした従属状況をも含めた意味でそう表現するならばまた話は別である。現実には後者の意味で、この語りは「女性のディスコース」として受け入れられていると言えるだろう。

Ulysses の他の挿話と同様、 '*Nausikaa*' でも、カトリックという宗教そのものもまた超越的な地位への安住を許されず、同様に幻想を追い掛ける他の「信ずる行為」と同列に引き降ろされている¹⁰³。 Kiberd は Penguin 版の注で、Gerty による Bloom の性的興奮の高まりと教会のミサとの併置について、両者の成立がともに幻想に多くを負っていることを指摘している（'By juxtaposing the religious and the erotic, Joyce suggests that both rely greatly on fantasy.'¹⁰⁴）。ちなみに、Kiberd は「Bloom の」と言っているが、それには疑問の余地がある。彼女自身は自慰行為はしなかったにせよ、彼が何をしているのかをはっきり認識できるだけの知識は持っていた上で共同作業に臨んだわけである。また、婦人雑誌のディスコースの関係上、彼女の感じたであろう性的快感についての描写が抑圧された代わり、一種マゾヒスティックな「自己犠牲」という自己陶醉という意味では Gerty もまたここで興奮を高めていったのは明らかなのだから、これは「ふたりの性的興奮の高まり」と礼拝との並置という方が適当であろう。さて、その Gerty にとっては実際、この両者にあえて意識すべき違いはないようである。彼女は親切な神父への個人的なプレゼントについてまるで恋人にあげるもののように悩んでいるし、ま

た教会から聞こえてくる音楽や薫ってくる香に対して肉体的に反応してみせたりもする (p.465)。彼女にとっては恋人も教会も同レベルで、自分の幸福のためには自ら尽くすべき対象となっているのである。同時に思い出されるべきは、テキスト全体でカトリックという宗教が信者を食い物にする営利的な側面がたびたび指摘されていることである。例えば Dignam の葬式では Bloom は 'Squareheaded chaps those must be in Rome: they work the whole show. And don't they rake in the money too? Bequest also ...' (p.102) とカトリックという組織全体を巨大な収奪組織とみなしているし、また産院で母子の生命の優先順位についての問いに対しても彼は、半ば誤魔化すための冗談としてもとにかく 'it was good for that Mother Church belike at one blow had birth and death pence' (p.509) と教会の儲けという観点を示して答えている。このように、カトリック教会自体を特権的地位から引きずりおろしてこの世に幾多存在する幻想に依った収奪組織のひとつとして一般化することにより、この挿話で提示されている宗教・性愛・消費経済における「或る幻想を信ずる事による搾取のシステムへの取り込み」という構造がより明確化されていると言えるだろう。

Bloom が宗教と広告をリンクさせて評した以下のような言葉がある。'Pray for us. And pray for us. ... Good idea the repetition. Same thing with ads. Buy from us. And buy from us.' (p.492) 強力な中心化・規範化のシステムとして、宗教も消費経済も、個人の個別の判断を奪うまでに「反復」して刷り込むのが最も効果的な方法のようである¹³⁾。広告業は商業とジャーナリズムの中間に位置する業種だが、Colin MacCabe は、Freeman の Miles Crawford が Stephen を鼓舞しようとして言った 'We'll paralyse Europe' (p.172) というセリフを引き合いに出して、*Ulysses* におけるジャーナリズム一般が加担している「麻痺」について指摘している。「大衆ジャーナリズムの言説はつねにイデオロギーのあからさまな現実のなかにみずからを中心化して、ただ胸の悪くなるような紋切型を際限なくくりかえすだけである¹⁴⁾」。同じ場所でのもうひとつの引用はそのように一定のパターンにはまったが最後「それ以外」の可能性をかえりみるヒマもない、ほとんど強迫的な自動性を獲得してしまうマスコミの現実を表している。('Now if he got paralysed there and no one knew how to stop them they'd clank on and on the same, print it over and over and up and back.' p.151)

つまり Gerty の意識による挿話は、男性によって所有/消費されるべき「流通商品」としての女性という概念

を、宗教・消費経済・男女関係という三つの大きな幻想システムを重ねた上に見るために有用なのだと言える。その中で婦人雑誌の熱心な講読者たる Gerty のような女性たちは、「幸福」をめざすための努力という一種の「宗教」的幻想にのせられやすいと設定されている。広告にのせられやすい愚かな消費者として資本家にていよく利用され、男との出会いによる幸福という幻想にひっかかって男性の都合のいいように性的に消費される対象となるというように。父権制という一見閉じたフィクションの中で、それを信じるが故に嬉々として自ら所有/消費されるべき存在となっていく女性というものと、その巨大なフィクションのシステムそのものを内面化されたものとしてなまなましく描くために、婦人雑誌のディスコースは最適であった。それがこの挿話前半の語りのモードがこれではならなかった理由であろう。

2.

前章 'Cyclops' は男ばかりのマッチョな世界の典型であり、そこでは Bloom は国民としても男性としても疎外された存在として描かれていた。よっておのずとその章では彼の非・男性的側面、戦争を好まない平和主義や国家・歴史の正当性への疑問などを前面に出していた。ここ 'Nausikaa' では、今まで見てきたように、彼が対置されるのはある種典型的な女性的ディスコースといわれるものである。この明らかにコントラストが意図された状況設定は、彼の男性性というものを再確認するための舞台とも言えるであろう。実際、彼はこの章前半での「行為」において、この一日の中で最も明確に、生理的な意味での男性性を示した訳である。ここでは、服に残る精液のじめじめとした感触、男性特有の性的 fluid の痕跡が例えば女性の経血と同様に、それを排出した肉体の性を触知可能な実感として本人と読者に認識させている。この感触の残るうちは彼はいやでも男としての自分と対峙しなくてはならないのである。

そんな状況と連動して、ここでの Bloom の対女性の意識の中には、常よりも女性を消費するモノとして見ようとしている傾向が特にあるように思われる。まず自慰の道具に使ってしまった Gerty への即物的な態度はもとよりであるが、その他の性的幻想についてもこの章では性産業との関わりがより強いように思われる。例えばふと頭に上った女性の下げきのイメージの出所を思い出すとき、彼が「覗き写真屋」 'Mutoscope pictures in

Capel street'(p.480)に行っていた事が明らかになる。また第17挿話 'Ithaca'での彼の引き出しの内容チェックや Mollyの証言から判明するように、彼は修道尼のポルノ写真を持っているのだが、黒人女や眼鏡の女などと同様その珍しさが女としての価値を上げるというような事を言ったりもする(p.479)。Gertyの評価にも適用されているこの「希少価値による価格高騰」はまったく資本主義経済における商品価値決定システムそのものである。もちろん通りに立つ売春婦や 'high class whore in Jammet's'(p.484)といった最も一般的な消費形式にも触れている。加えて、たいした規模ではないが、自らこうした性の流通に自分の「所有物」たる女 Mollyをのせた事もあることが分かる。彼は昔、金がなかった頃に彼女の梳き髪を売ったこともあるのである(p.481)。

月経に関する執拗な興味とこだわりもこのテーマの別変奏と考えられる。先程述べたように、女性のセクシュアリティは幾つもの生理学的なプロセスによって定義されており、そうした「科学的要素が既存の「神話」と絡み合っ、て、「女の身体は男よりも性に支配されている」「女性とはまず性的な生物である」というように、女性の存在をかたちづくる幾多の要素の中で、理知的精神を不当に矮小化する一方で、セクシュアリティだけを拡大・歪曲しがちである¹⁹。Bloomの意識に上る、女性と月経に関するありがちな下卑た俗信はその典型的な例である。月経期間中には女性は 'All kinds of crazy longings. Licking pennies.'(p.479)となるというような過剰な性衝動の強調とか、 'Devils they are when that's coming on them.'(p.481)に見られるような、理性を完全に圧倒しのりとする性本能というイメージにその具体例を見ることができる。特にこの女性における精神性の無視というのが、女性を性という一元的存在として捕らえようとする男性の視線の特徴であると言える。

こうした、女をモノとして見ようという Bloomの姿勢、男たちの世界での「流通商品」であるのだから所有の対象にもなれば消費の対象にもなるという姿勢は、ここでは結局 Mollyに裏切られたショックをやわらげようという自己防衛行為なのだと推察される。この事は、Bloomの思考が彼女の髪を売った事から横滑りして、遂に妻と Boylanとの情交についても金を取る事ができるのではないかとこのころにまで至るときに判明する ('Why not? All a prejudice. She's worth ten, fifteen, more a pound.'p.481)。ここでは Bloomは、こんな事を大事だと考える事自体が偏見であり、髪を売っていいなら身体だっていいじゃないかと開き直って見せている。それ

が本気でなく無理をしての虚勢なのは、この不倫の話題に長くは堪えられず、さき自分が Gertyで楽しんだ事や他の過去の女での楽しみのことに戻ろうとする事に明らかであるが、結局彼の意識は Mollyのもとに戻ってしまう、というパターンが繰り返される。ある種の女性は配偶者のいる男を奪いたがる傾向があるという事を考えていたとき、彼は不意に「自分は他人のものなど欲しくない」と言い出す。 ('Different with me. Glad to get away from other chap's wife. Eating off his cold plate.' p.483)言うまでもなく、これは Boylanを念頭に置いた相手不在のあてこすりであるが、ここでも皿に残った食物という、生々しさと取るに足りなさを同時に巧みに表すたとえによって、所有されるモノとしての女性=Mollyと所有者としての男性=自分との差を具体的に打ち出さんとしている。このように彼の「消費」への執着は、前半で Gertyが捕らえられていた諸ディスコースの裏返しての適用であり、寝取られ男としての苦悩の中で、父権社会・消費社会での基本設定上での男性優位というものを通し、かろうじて自己の存在を確認・保証しようとする行為なのだと考えられよう。

しかしなぜ Bloomはここで、女性の所有と消費というテーマに対してここまで露悪的に振る舞い、考えようとしなくてはならないのか?そのひとつの理由は、先に述べたようにこの挿話前半における「自慰」という行為によって、自らの属する「男性」性と父権社会の根本問題に触れ、それに対して彼としてはいつになく「男性」として対峙せざるを得なくなってしまったからではないだろうか。

自慰とは言うまでもなく「無駄な射精」な訳であるが、この擬似生殖行為の不毛性は、この挿話の前後 ('Cyclops', 'Circe')での死刑執行された男の erectionのエピソードに呼応して見られるような、男性の生殖の性の一種こっけいなまでの無力さを表しているように思われる。つまり、現実的な意味で生産者ではありえない男性が、それを持つ女性に感じる根源的な劣等感ともいような意識である²⁰。もちろん女性だけでも妊娠は出来ないのであるが、最終的に「彼が産ませた」事は確定出来なくても「彼女が産んだ」事だけは確実に分かるというのが現実である。この点が *Ulysses* という作品全体に渡って Bloomと Stephenの共通のオブセッションとなっているのは周知の事であろう。そして生殖における男性の性の生産性の真の地位は「賛助者」以上のものでありえないのではないかとこの不安、これこそがその反動として、一夫一婦制の下に男性の血に

こそ人間のアイデンティティがあるという父権制というフィクションを作り出す原動力となったと言えるだろう。「子供の父親」に関しては結局男は交換可能な存在だという不安を解消(少なくとも隠蔽)するためには、女性の性交のパートナーをひとりに限定することが絶対に必要である。この基本原則が守れない男は、力が足りぬ故に社会の規範を乱す者として非難されねばならない。父権制度というフィクションは、古今の夫たちのそうした努力によって維持されてきたのである。

「生産」から切り離しての「快樂」における女性の性の商品化は、男性にとってのこの不安を緩和するための方策のひとつであろう。女性はこのように「生産」に関しては絶対的な authority を確保しており、一方で男性には自分が父親であることについて本質的な根拠を持つことが出来ない。ある種の無名性が拭い去れないのである。しかしこれを「生産」という女性に有利な土俵から引き離し、「快樂」という次元で流通する「商品」とすることで、「女性の性は無名性を帯びた消費の対象とすることが可能である」というフィクションを作り出すことができる。この「女性(の性)こそが interchangeable である」という神話によって、男性は女性を自分たちより優位な立場から引きずり下ろして安心することができる。こうした男性の女性との関係への根源的な不安が、彼らをより刹那的・先鋭的な「消費」行動に走らせているのだと言えよう。

また、芸術という分野においては、男性こそが生産における主体 Creator であり、女性は彼にインスピレーションを授ける女神 Muse として消費される、という伝統的な図式が存在する¹⁷⁾。女性が長らく芸術的創作活動から疎外されてきたのも、この意味で当然である。芸術作品を「生み出す」という行為が、出産においては入手し難い authority への一種の補償行為だとしたら、女性を参入させてしまっては意味がない。例えば本編における「芸術家」Stephen の次のような言葉に、男性芸術家の母なる女性への対抗意識が見て取れるであろう。'In woman's womb word is made flesh but in the spirit of the maker all flesh that passes becomes the word that shall not pass away'(p.511)

しかし、今の Bloom にとっては、自分の男性性をこのような父権的フィクションの文脈で考えるのは決して救いにはならないし、かえってつらい事である。何よりもまず、彼はここ 10年 Molly を相手に妊娠に至らせるような性行為を完遂できていない、という事実が厳然として存在するのである。この次元で彼はこのフィク

ションへの参加資格さえも認められるかどうか怪しいところである。また彼は芸術を生み出す Creator という立場にも憧れているが、現在の時点では彼自身はただの広告取りであり、そういう存在だとは言えない。Mr. Beaufoy という人物が懸賞小説に入選したのを今朝の新聞で見て、Bloom は一日中ことあるごとに「自分にも書けないだろうか」と考えてはいるが、結局実行には移さない。こういう生産的な男性への Bloom のコンプレックスは、彼の意識の中で断片的に浮かぶこの入賞者の名前が、現在病院で陣痛に苦しんでいる友人の Mrs. Purefoy の名前と紛らわしく並置されている事などに浮かんでくる ('Mrs Beaufoy, Purefoy' p.486)。

それでも、残った衣服の湿りは否応なく彼が肉体的には男性であることを確認させる。この苦境の中、'Nausikaa' の時点では、前述のように彼はほとんど自虐的にもっぱら「買い、消費する存在」である事に、自分の男としてのアイデンティティを求めようとしている。しかし「女性を所有し消費する」ことを前提とする男性/芸術家という既存の父権的幻想システムの中では Bloom は規定を満たし得ない敗者=寝取られ男 (Cuckoo) でしかない。逆に彼は、このシステム内で形成されるべき主体のあり方とのズレに苦しむことになってしまっているのである。彼がこの苦悩を真に脱するためにはこの幻想をふりはらいシステム自体を捨て去る他に道はないのだが。

3.

Bloom にはもうひとつ、どうしてもその枠の中でうまく自分の身の置き所を見出せない重要な社会通念がある。「国家」という、男性が主体として作り上げたもうひとつの強大な共同体の幻想がそれである。この点は昨今非常に活発に議論されているテーマであるだけに、単純に割り切って論ずることは不可能と承知しているが、本稿での中心議論での必要に合わせてごく簡単な議論を試みようと思う。

この「国家」の問題については、Bloom はいろいろと明確な意見を持って発言しているし、またせざるを得ない状況にいる。なぜなら彼は明確な国土や国民という形を持たない民族ユダヤ人に属している故に、「国家」というものを成立させている世界の分節方法ではうまく割り切れないところに存在しているからだ¹⁸⁾。逆に 20 世紀のアイルランド人にとってはこれは、イギリスによる支配と搾取、経済的苦境、その一方でゆたかな

独自の文化的伝統や言語へのプライド等、いくらでも明確にするための材料のある概念である。そして「自治」こそは、彼ら Dublin の男たちにとっての幸福の宗教なのである。

そんなアイルランド人たちにとって、「自分の所有権を侵された時にはどうすべきか」という問いへの答えは「力づくでの奪回」である。第12挿話 'Cyclops' において、Bloom が彼らとの「国家」についての論争中、ユダヤ人とは迫害され当然自分たちに属するはずのものを不正に奪われた民族なのだと主張した際、中のひとり John Wyse はこう答える。

'Stand up to it then with force like men'(p.432)

この文脈では、所有権を守る事が腕力という「男らしさ」と当然のように相補関係に置かれている。ここに、「国家(とその歴史)」とは「父権制」と相似の、男性によってつくられた一大フィクションである事が確認される。citizen 達の観点からすれば、自分の国を明確化しそれに執着し責任を持つことと、自分の妻を他の男に取られずに専有しておくことは、共に男が当然その力によってすべき事なのである。この事はまた、なぜ彼らにとって Bloom が目障りな存在なのかも示してくれる。「国家」「父権制」のように、いかに強力で自然化しようとして、フィクションはどこまでいってもフィクションである。しかし彼らにとっては自己が何者かという事を確定するための重要な秩序であり、できる事ならこの絶対性を信じ切りたいし、それが幻想である事は認めたくない。ユダヤ人という存在のあいまいさは、嫌でもその秩序の在り方に疑問を付させるものである。この状況で彼らに可能なことは、自分たちに可能な分類方法で彼という存在を無理遣りにも分類してしまい、できる事なら否定的な評価を付加することである。

The strangers, says the citizen. Our own fault. We let them come in. We brought them. The adulteress and her paramour brought the Saxon robbers here A dishonoured wife ... that's what's the cause of all our misfortunes. (p.420)

この「不貞の妻」とは直接には Parnell と関係した女性の事であるが、当然ここには皆の公然の秘密と言ってもよい Molly と Boylan との関係もあてこすられている。citizen の、アイルランドが「よそ者」に好きなようにされているという意識に、イギリス人のみならず Bloom を

代表とするユダヤ人も含まれているのは、彼が Bloom を可能な限り疫病神のはずれ者として扱おうとしている事で分かる。同時に、自分たちにとっては一種の加害者と考えられる彼が、Boylan という間男つまり「よそ者」に女房を寝取られている「被害者」つまり自分たちと同じく侵略を受ける苦境にある、と考えるのが面白くて仕方ないのである。こうして彼らはひとまず安心する。

しかしこの件では Bloom はやられてばかりはいない。

— But it's no use, says he. Force, hatred, history, all that. That's not life for men and women, insult and hatred. and everyone knows that it's the very opposite of that that is really life. ... Love, I mean the opposite of hatred.(p.432)

彼は敵を設定して自己のアイデンティティを決めるという方法自体に疑問を呈しているのである。彼が提出する解決はまず「国家」という大前提を解消した上での universalism、そして資本主義ではなく一種の社会主義下での労働に見合った平等で十分な金銭の配当というものである。国家間の敵意を生み出す元凶は問題は結局金、つまり所有に関する優劣である、と Bloom は見て取っている (p.745-6)。この結論は彼がユダヤ人だからこそ思いついたものであろう。ユダヤ人は明確な国家・国土を持たないために支配主体でも被支配国でもありえないが、しかし大きな金を動かしている為に長らくスケープゴートとされてきたからである。とにかく差異をなくし、比較や争いの種を減らし、代わりに連帯を育むこと。彼の言葉に 'Mixed races and mixed marriage.' (p.611) というのもあるのだが、この 'mix' というのは彼の戦略のキーワードとなり得るだろう。

このように「国家」というフィクションに対しては、Bloom は自分を秩序自体にはまらない者として捕らえ、外部からの解体という思考が可能になっているようである。こういうフィクショナルな関係を保たなくてはいけないという強迫観念それ自体が恐怖と不安の元凶であり、その幻想の解体こそが根本的解決なのだと感知しているのである。だが自らが「男性である事」に関しては、外部からの思考はそう簡単にはいかないようである。

この点について、ジェンダーのディスコースを消費のそれとの絡みの周辺で考察してみよう。消費経済のディスコースで、Bloom は他の男性たちよりは特権的な立場に居ると言える。広告を作る側、メディアによっ

て主体を形成・操作する側に、末端ながら参与しているのである。この時、一方で確かに彼の思考は、日常生活の中に圧倒的なパワーをもって遍在する広告の言語に、一般大衆同様半ば植民地化されつつある¹⁹⁾。だが同時に、作り手の立場故に若干の批評的距離が許されている。彼はそのからくりを多少は分かっている、気が付いているときにはその幻想に飲み込まれることなく、創作者としての眼で評価を試みている。この境界的なスタンスは、彼のジェンダー規範への対応とパラレルだとみなす事ができるだろう。父権制社会の中の男性として、当然のように彼はその「紋切型」のコードを認知している。しかし、現実の行動の中で、彼は「紋切型」としてのジェンダー規範に、諾々と従いそうでは実は従いきれない。‘Cyclops’での発言や周囲の彼への評など、彼の精神的なジェンダーは男性性には納まりきれず、逆に多分に女性性を帯びている。やはり彼は境界的な位置にあるために既定秩序の整合性を脅かす存在であると言える。

しかし、このように精神面では格段に周囲よりも「外部」に出やすいところに居ながら、少なくともこの挿話では、厳然と示されてしまう肉体における生物学的・生理学的男性性が、彼の唯一の脱出法であるフィクションの解体に際して、どうしてもはずれぬ軛となってしまうというのが、ここで提示されている最大の問題であろう。挿話の終わりの部分での Bloom の肉体的な疲れは、男性として消費し所有する立場であることを強要される疲労と重ねられている。生殖機能による性別、ましてやそれに基づく役割分担の強制は全く恣意的なものでしかないのだが、その意味付けはさておき確かに肉体的な差異は存在する。差異化の基準設定の恣意性への疑問の抽象性と不確かさに比べ、この身体の疲れと衣服の湿りには圧倒的な感覚的リアリティがある。女性が経血その他の生理学的要素によって表象され、その性的役割に縛り付けられてきたのと同様、Bloom も精液の存在によって有無を言わず自己の男性性を認識させられ、それに閉じこめられざるをえない状況に追い込まれているのである。ここでは、ジェンダーの問題の相対化の難しさとは、射精後の身体にまとりつく振り払おうとしても払いきれない疲れそのものなのである。

‘Nausikaa’の挿話においては、Bloomの思考は結局生

産者としての女性というテーマに回帰してしまう。彼は、Gertyとその一行が帰っていくのを見ながら、Millyの成長の早さと重ね合わせながら「母となるべき存在」としての少女について思いを巡らす。そして結局は彼の思考はMollyと彼女の不倫へともどってしまう。娘Millyを加えての「家族」という形態は、「所有者」「管理者」という感覚をBloomにより強く思い起こさせるのである。続く、母親に似た娘であるらしいMillyについての回想は、Bloom家における生産者としてのMollyという存在を思い出させ、また既に初潮を迎え独立した年頃の娘の姿は若い頃のMollyの反復、そしてまたいつか彼女によって生産が繰り返されることを思わせる(‘Frightened she was when her nature came on her first. ... Strange moment for the mother too. Brings back her girlhood.’ p.495 この後にMollyとのGibraltarでの記憶が続く)。生産が反復されるうちは、家父長というアイデンティティを捨てないかぎりにはBloomには女たちのセクシュアリティを管理する義務がある。そしてそのシステムの中にいる限りは、彼は怠慢な義務不履行者と分類されざるを得ず、‘Cuckoo’と呼ばれざるを得ない男なのである。このようにしてこの挿話は、Bloomが自らの肉体的な男性性との直面を余儀なくされるために、同時に女性の「生産者」という肉体的側面、父権制の内包する不安の根源である故に特に厳しくチェックされる部分にも対峙せざるをえず、そこを経由して今度は父権制という社会的フィクションの中で自分の男性性と向き合わされるという過程をたどった。社会的に形成される概念であるジェンダーというものがいかに性の生物学的側面に首根っこを押さえられているか、それゆえにいかにこの問題に関しては外部からの思考が困難であるか、こうした問題が痛みをもって描かれた挿話となっていると言えよう。

それでも一方で、彼にはそこからの脱出の可能性は提示されているようである。黄昏時の浜辺でうとうとするBloomの周りにあらわれたのは小さなコウモリ‘Ba(t)’(p.492)である。飛ぶ哺乳類であるBatは、鳥(Cuckoo)でも四足獣(Horned Bull)でもない、「あいのこ」‘a mixed breed’(p.492)と表現されている。昼と夜の間の黄昏時にBloomのもとを訪れたコウモリは、‘a half and half’(p.416), ‘one of those mixed middlings’(p.439)と周囲の男たちに評され、そして彼自らの幻想の中でも‘a finished example of the new womanly man’(p.614)と定義されてしまうBloomの「両性具有」者、つまり父権制度の典型的成員となる‘manly man’ではない何らかの存在としての可

能性を示唆しているのかも知れない。

このように、‘Nausikaa’は父権制度という巨大なフィクション装置が、いかに精神と肉体の両方を巧みに利用して、女性と男性の両方を取り込んでいるか、という問題に取り組んだ挿話として読むことができるだろう。Gertyについての部分では、通常は肉体を通しての拘束が強調される女性について、消費のディスコースとの絡みでの精神的回路を通じてのコントロールのあり方が示された。Bloomについての部分では逆に、支配的な主体として精神性を強調されることの多いはずの男性が、現実にはいかになまなましく肉体によって制度に縛り付けられているかが提示された。この二人の共通点はともに逃避主義に陥っていることだと言われるが⁽²⁰⁾、それは彼らがフィクションによるせめてもの救済を望んでいるという事だろう。今見てきたように、‘Nausikaa’の時点では、眼前のフィクションは余りに強力で包括的であり、もちろん可能性はゼロではないが、今の状況ではふたりにはそこからの脱出はまだ無理である。「歴史」や「国家」と同様、ジェンダー規範と父権制もまた Bloomにとっての、目覚めたくとも多少の事では目覚められない悪夢なのだという苦しみを、この挿話は描いているのである。

NOTES

- (1) Paul van Caspel, “Nausicaa” (Bernard Benstock, ed. *Critical Essays on James Joyce's Ulysses*. G.K.Hall, Boston, 1989)における Anthony Burgess, *Joysprick*. (London, 1973)からの引用 p.231.
- (2) Marilyn French, *The Book as World: James Joyce's Ulysses*. (Harvard University Press, Cambridge, Mass. 1976) p.157
- (3) *Ulysses* 本文の引用はすべて *Ulysses: Annotated Student's Edition: with an Introduction and Notes by Declan Kiberd* (Penguin, London, 1992)によるもので本文中にカッコで示した。なお、‘Nausikaa’の表記はこの版に従ったものである。
- (4) Declan Kiberd, Introduction and Notes in *Ulysses: Annotated Student's Edition* (Penguin, London, 1992) p.1085.
- (5) ジョン・バージャー『イメージ - 視覚とメディア』(伊藤俊治訳、Parco出版、1986/原著 John Berger, *Ways of Seeing*, Penguin Books, Harmondsworth, 1972) p.179.
- (6) バージャー、前掲書、p.175,182.
- (7) 広告の宗教的側面については、ジェニファー・A・ウィキー『広告する小説』(富島美子訳、国書刊行会、1996/原著 Jennifer A. Wicky, *Advertising Fictions: Literature, Advertisement, and Social Reading*. Columbia University Press, New York, 1988) p.243,249.
- (8) 消費社会における広告を通しての主体の形成については、ジャン・ボードリヤール『消費社会の神話と構造』(今西仁司、塚原史訳、紀伊国屋書店、1995/原著 Jean Baudrillard, *La Societe de Consommation: Ses Mythes, Ses Structures*, (Gallimard, 1970) p.123、ウィキー、前掲書、p.210、Rachel Bowlby, *Just Looking: Consumer Culture in Dreiser, Gissing and Zola* (Methuen, London, 1985), p. 18 - 34、Thomas Richards, *The Commodity Culture of Victorian England: Advertising and Spectacle, 1851 - 1914* (Stanford University Press, Stanford, Cal. 1990) p. 210.
- (9) Bowlby, Ibid. p. 20 - 22
- (10) 資産としての肉体とその美しさの意味については、ボードリヤールの前掲書 p.187- 225を参照。
- (11) French, Ibid. p.167; C.H.Peake, ‘Ulysses: Techniques and Styles: “Nausikaa”’ (Benstock, ibid.) p.226.
- (12) Kiberd, Ibid. p.1085.
- (13) ウィキー、前掲書、p.249.
- (14) コリン・マッケイブ「ジェイムズ・ジョイスと言語革命」(加藤幹郎訳、筑摩書房、1991/原著 Colin MacCabe, *James Joyce and the Revolution of the Word*. Indiana University Press, Bloomington, 1979) p.157.
- (15) Suzette Henke, ‘Re-visioning Joyce's Masculine Signature’ in *Joyce in Context* ed.by Vincent J. Chang and Timothy Martin (Cambridge University Press, Cambridge, 1992) p.139 ‘the female as a frightening reminder of physiological process’; p.140: ‘woman, as a reminder of the flesh and of physiological processes connected with mortality ...’
- (16) 女性の生産性への男性の不安はむしろ Stephen のテーマかも知れないが、ここでは彼にまつわ

- る議論は省略する。cf. Joseph A. Boone, 'Staging Sexuality: Repression, Representation, and "Interior" States', in *Joyce: The Return of the Repressed*, Susan Stanford Friedman ed. (Cornell University Press, Ithaca, 1993) p.203. Colleen R. Lamos, 'Joyce and Gender Justice in *Ulysses*' in *Joyce in Context*, p.92.
- (17) 例えば Susan Guber, "'The Blank Page" and the Issues of Feminine Creativity', in *The New feminist Criticism: Essays on Women, Literature, and Theory*, Elaine Showalter ed. (Virago Press, London, 1986) p.292-294.
- (18) 川口喬一「『ユリシーズ』演義」(研究社、1994)によれば、Bloomのユダヤ人である事自体が大変あいまいさを含む問題である (p.255~258)。また、Laura Doyleは、Bloomは「ユダヤ人=女性的」という gendered racismをパロディ化したもので、人種(民族)問題はジェンダー問題との関わりでも彼の境界的アイデンティティの表象上重要になってくる事を指摘している ('Races and Chains: The Sexuo-racial Matrix in *Ulysses*', in *Joyce: The Return of the Repressed*, Susan Stanford Friedman ed. Cornell University Press, Ithaca, 1993, p.149-189)。
- (19) ウィキーマ、前掲書、p.213.
- (20) French, *Ibid.* p.159 - 60; Peake, *Ibid.* p.226; van Caspel, *Ibid.* p.235.